

まで行なわれた。

この間、健康障害としてのアスベスト肺に肺癌、胸膜、腹膜の悪性中皮腫の合併が社会的に注目されるようになった。

こうしたなかで、昭和六十一年（一九八六）に空母ミッドウェイの改修が横須賀で行われ、ミッドウェイから出た石綿廃棄物が路上放置され、これが社会的に関心もたれ、発癌性があるというので、学校その他の建物で使用されたアスベストが問題になってきた。

国内での規制がきびしくなった関係で、日本のアスベスト企業が周辺諸国に進出していて、そこでも問題になり始めている。

（労働科学研究所）

## 扁鵲の経絡説

—「三陽五会」の検討—

遠藤次郎

扁鵲の治療は経絡を用いた治療の初期の代表的な例であり、したがって、経絡説の起源を検討する上で見逃すことができない。

扁鵲は戦国時代の名医としてあまりにも有名であるが、その具体的な治療法を記した文献は極めて少ない。この数少ない資料の中で、『史記』『扁鵲伝』は、彼が経絡を用いて治療していたことを記している（虢の太子を治療した話）。ただし、この中でさえ、「中経・維絡」以外に直接経絡については記していない。このため、彼の経絡説についてはこれ以上究明しようもなく、今日まで放置されたままになっている。しかし、同じ話でも、『史記』以外の文献を参考にとすると、『史記』の不明解な記述を捉え直すことができる。たとえば、扁鵲が太子を治療した部位は、『史記』

では「外の三陽五会」とあるが、『韓詩外伝』や『説苑』では「三陽五輪」となっている。後者の説を採ると、これが他の医書との関連を生じ、あらたな経脈説として浮かび上がってくる。以下において、演者は「三陽五輪」の意味の解明を行なうとともに、これを手掛りに扁鵲の経絡説の探索を試みた。

「五輪」は『扁鵲伝』の他所に類例がみられ、「五臓の輪」（体表にあらわれた五臓の反応部位）の意味である。また、太子の病は陽脈と陰脈の抗争に由来する、と扁鵲自身が解説しているから、「三陽」は三つの陽脈と考えられる。すると、「三陽五輪」の意味は、三つの陽脈と、五臓に直結した五つの陰脈の輪穴、ということになる。この解釈は次のことから傍証できる。すなわち、扁鵲の時代にそう遠くない時代の書物と推定される『古針経』（『靈枢』「九針十二原」所引）に、五つの陰脈と三つの陽脈の記載（「取五脈者死、取三脈者恒。奪陰者死、奪陽者狂」）があることから、当時、三陽五陰の経脈説が存在していたことがわかる。

『史記』にある「三陽五会」は「百会」（頭頂のツボ）を

指すと一般的に解釈されている（『甲乙経』に「百会」の別名として「三陽五会」がある）。仮に、この通説が正しいとしても、三陽五陰の経脈説が否定されるわけではない。なぜならば、「百会」の別名としての「三陽五会」は、三陽脈と五陰脈のすべての脈が頭頂に「会」することから名付けられたと考えることができるからである。

次に、三陽五陰の経脈説の意義について検討する。これには『素問』「生氣通天論」の説が参考になる。この篇の中に、「其生五、其氣三」および、これに関連した記述がある。ここでは、「其生五」は五臓の精気を、「其氣三」は外界からの三つの陽気（朝と昼と夕方陽気）を意味している。さらに、外界からの三つの陽気と、体内の五つの陰精との調和によって健康が保たれていることを論じている。この説を三陽五陰の経脈説と比較すると、明らかに、「其氣三」は三つの陽脈に、「其生五」は五つの陰脈に対応している。この両者の対応から、三陽五陰の経脈説は次の生理観に基づいているとみなせる。すなわち、外界から陽気を導入する三つの陽脈と、五臓の精気を体表に運搬する五つの陰脈が交流し合って体の恒常性を保つ。

三陽五陰の説は経絡説の歴史の変遷から見ると初期のごく短期間にしか登場しない。近年発掘された馬王堆出土の『脈灸経』は、内容的に先秦時代のものと推定されるにもかかわらず、六陽五陰の経脈説を採っている。また、『素問』や『靈枢』の中で初期のものと考えられる部分の中でも六陽五陰の経脈説である。では、六陽五陰の経脈説と三陽五陰の経脈説はどのような関係にあるのであろうか。三陽五陰の経脈説は六陽五陰の経脈説の前身である、と演者は以下の理由から考える。まず、今日の経脈説（六陽六陰）を見てもわかるように、手の三陽経と、同名の足の三陽経（たとえば、手の太陽経と足の太陽経）は頭部で繋がり合っている。また、古典にしばしば記されているように、足の三陽経は「躁」の状態になると、同名の手の三陽経に脈気を溢れ出させる（『靈枢』「本輸」、「終始」、「衛氣行」など）。このようなことから、手、足の同名の陽経を一連のものとして扱い、六陽経を三陽経とみなすことが可能である。すなわち、扁鵲の時代に三陽経であったものが、後になって手の経が足の経から区別され、六陽経へと展開したと考えられる。

以上のことから、扁鵲の三陽五陰の経脈説は、後の六陽五陰の経脈説、さらには、今日の六陽六陰の経脈説の源泉であるとみなすことができる。なお、この経脈説に対する理解は単に経絡説の中ばかりではなく、当時行なわれていた生理観や病理観を考える上にも重要な示唆を与えてくれる。

（東京理科大学薬学部）